

国際交流奨励賞・日本研究賞

タバスム・カシミリー

Tabusum Kasimiri 氏

元大阪外国語大学ウルドゥー語教師、ウルドゥー文学研究者
〔バキスタン〕

日本の文化に関する素晴らしい賞を賜りましたことに感謝申し上げます。私は、自分のような浅学がこのような賞を頂戴するに値するなどは今まで一度も考えたことがありませんでした。そしてこのたびの受賞に至っては、この賞が本当に私に与えられたのかと考えている次第であります。

受賞に際し、古い友人、知人たちと会う機会を得て、私は昔のよき思い出を思い返しております。24年間にわたる大阪外国語大学での教員生活を終えて、この4月に私は祖国パキスタンに戻りました。この24年間は、私の人生にとつて、最も貴重な財産であります。この期間、私は大阪外国語大学において、たいへん恵まれ落ち着いた学術的環境で自分の研究や創作活動を行ないました。そしてこの時期にこそ、自らの研究生生活の結実となった『ウルドゥー文学史初期から1857年まで』を完成させたのであります。また、加賀谷寛大阪外国語大学名誉教授による『ウルドゥー語辞典』編纂計画においてもお手伝いをさせていただきました。

今年の春、この辞書が東京で刊行され、日本人学生がこの辞典の恩恵にあずかっていることはたいへん喜ばしいことだと思っております。

『ウルドゥー文学史初期から1857年まで』の執筆計画は大きな困難を伴いました。文学史を政治的、社会的、文化的歴史の流れのなかに見ようとはしましたが、いざそれを執筆することは容易なものではありませんでした。構想を練るための多くの時間を要し、また多くの資料を必要としました。

私にとつて幸運だったのは、大阪外国語大学の学術的環境が、これらの条件をすべて満たしてくれたことでした。研究、執筆に当たって求められる精神的な安定も整っていました。もし私が、文学史執筆の作業を自分の国で行なっていたら、おそらくは完成できなかつたのではないか、また仮に完成していたとしても、執筆内容における思想的なビジョンはこれほど開けていなかったかもしれないと思っております。

日本滞在中、一方で学術研究にいそしむかたわら、日本文学に触れる機会を

得ました。滞在中の孤独感のなかで、私は良寛や萩原朔太郎、与謝野晶子、宮沢賢治、白石かずこらと対話していました。そして彼らの詩作をウルドゥー語に翻訳、紹介いたしました。1983年、私はヒロシマを主題とした詩を知りました。私はそれらの詩に強く影響を受けたのでした。それはまるで、この悲劇が自分自身に起こったかのような印象を受けたのであります。そこで私はこれらの詩を翻訳、紹介いたしました。

私の国の作家はジャパンファウンデーションを知っております。数年前、パキスタンの著名な詩人キシユル・ナーヒードさんを招へいいただきました。これは文化交流の素晴らしい例であり、このような文化交流が今後も続くべきであると考えます。

最後になりましたが、このような浅学が賞を賜りましたことについて、いま一度ジャパンファウンデーションとその関係諸氏に御礼申し上げます。ありがとうございます。

(原文はウルドゥー語。日本語訳：山根聡・大阪外国語大学地域文化学科助教授)



日本におけるウルドゥー語・ウルドゥー文学研究の促進に尽力した業績を称えるとともに、日本とウルドゥー語文化圏の学術・文化交流および日本とパキスタンの相互理解促進におけるさらなる活躍を期待して、国際交流奨励賞・日本研究賞を贈った